

長篇小説

出船の唄 (59)

川上茂

丁度、彼がブラジルに居た頃一度會つた事のあるブエノス・アイレスR商會の支配人某からアルゼンチン國の様子を語らかに聞かされた當時の事を思ひ出でて、「さうだ。僕はもう一度南米へ行かう。戦地で死地と決心し、すぐさま東京して再度の南米渡航準備に取りかかり、愈々あと十日で、母なき母國を後に、潔く出帆する事になつた。

再度南米へ

(二)

ネオナサンの光に、不夜城を浮き出させた東京は銀座裏通りのカブト一店の二階の洒落た日本間である。

「サア、飲め、もつと飲めかも知れんからああ、ハハハ」と豪傑笑ひを乍ら相手に盛んに酒を強ひてゐるのは往年の梶原大作、今は時めく少将閣下である。

「いや、もういけません。これが廻はつてしまつて歸へりが心配ですから……」

無理にも注がうとしてゐる女のは橋本照雄中尉である。

「そらとも。飲め！」

下戸の照雄を嘲ふ様に云つてゐるのは親友川上大尉である。今や酒宴は醉である。

「橋本！今夜は君の南米行送別

の会ぢやないか。心おきなく故郷の酒をうんと飲んで行け！」

橋百貨店の仕入部に勤めてゐる學友小木である。

「口々に喚き乍ら友人や戦友達が、左右から彼を杯攻めに葉を見出せなかつたからである

葉を見出せなかつたからである

葉

